



No.112
2022.4.8

SEA NEWS



- ① … 三菱重工浦和レッズレディース、初優勝 ～皇后杯JFA第43回全日本女子サッカー選手権大会
理事会・評議員会・運営会議開催 専門委員長・種別委員長 (2022・23年度)
- ② … 技術委員会座談会「熱が違う」～山崎茂雄氏をFAコーチに迎えて～
- ③ … 県大学連盟所属チームの躍進に期待～東京国際大学、城西大学W昇格を祝う～ 東京国際大学 前田秀樹監督
- ④ … 城西大学、11年振りに関東2部へ昇格～東海林 毅 監督に聞く
- ⑤ … 「関東大学リーグNorth」設立 1種委員長 植松孝博・国体関東ブロック～成年男子監督 吉田 弘
- ⑥ … 大会記録 ●県内大会 1種・大学・3種
- ⑦ … 4種・女子・フットサル ●県外大会 4種・女子・フットサル インフォメーション 編集後記

●発行/(公財)埼玉県サッカー協会 〒330-0074 さいたま市浦和区北浦和1-21-18 雁ヶ音ビル204号室 Tel 048-834-2002・Fax 048-834-2004 <http://www.saitamafa.or.jp/>

三菱重工浦和レッズレディース、初優勝 ～皇后杯 JFA 第43回全日本女子サッカー選手権大会

2月27日、WEリーグの後半戦再開を前に、「皇后杯 JFA 第43回全日本女子サッカー選手権大会」の決勝戦が行われ、67分に決めた菅澤優衣香選手のゴールが決勝点となり、三菱重工浦和レッズレディースが初優勝しました。おめでとうございます。

なお、同一クラブでの天皇杯、皇后杯の獲得は2クラブ目。今度はリーグ戦での快挙に期待しています。

- 11月27日～2月27日 サンガスタジアム by KYOCERA 他
- 4回戦 **三菱重工浦和レッズレディース** 1 - 0 伊賀 FC くノ一三重
ちふれ AS エルフェン埼玉 0 - 2 アルビレックス新潟レディース
大宮アルディージャ VENTUS 2 - 1 スフィーダ世田谷 FC
- 準々決勝 サンフレッチェ広島レジーナ 0 - 2 **三菱重工浦和レッズレディース**
大宮アルディージャ VENTUS 0 - 4 日テレ・東京ヴェルディメニナ
- 準決勝 **三菱重工浦和レッズレディース** 1 - 0 セレッソ大阪堺レディース
- 決勝 **三菱重工浦和レッズレディース** 1 - 0 ジェフユナイテッド市原・千葉レディース



優勝 三菱重工浦和レッズレディース

©URAWA REDS

理事会・評議員会・運営会議開催

2月5日に21年度第2回通常理事会、同19日に評議員会を経て、4月2日に22年度第1回運営会議を開催しました。理事会・評議員会で了承された今年度の事業計画と予算、専門委員長・種別委員長の選任について発表がされました。事業計画と予算につきましては追ってホームページに掲載いたします。なお選任された専門委員長・種別委員長は表の通りです。

専門委員長・種別委員長 (2022・23年度)

※ 新任

フェアプレー・規律委員会	池田 一義 (現理事) ※	総務委員会	上條 岳 ※
財務委員会	貴田 浩朗 (現理事)	1種委員会	竹沢 茂 ※
技術委員会	田中龍太郎 (現理事) ※	2種委員会	二見 元 ※
審判委員会	木村 滋 (現理事)	3種委員会	都所 亮介
広報委員会	藤田 雅彦	4種委員会	大山 武士 ※
施設委員会	鈴木 豊	女子委員会	渡辺 典子 (現理事)
医事委員会	関 純 (現理事)	シニア委員会	樫村 憲二 ※
科学委員会	石崎 聡之 ※	フットサル委員会	早川 祐司

技術委員会座談会

「熱が違う」～山崎茂雄氏をFAコーチに迎えて～

SFAはこの2月1日から、FAコーチ(技術専任者)として山崎茂雄氏と契約を結びました。埼玉のサッカーさらに前進させるべく、頼れる味方が加わったと言ってもいいでしょう。以前から馴染みのある方も、そうでない人もいらっしゃるでしょう。柏悦郎技術委員長の退任と田中龍太郎新技術委員長就任も合わせて、これからの技術委員会の抱負を伺います。(聞き手/広報委員 荒川裕治)

「指導者のレベルアップを」(柏)

—まずは山崎さん、「お帰りなさい」ですね。

山崎 17年ぶりに埼玉へ戻ってきました。今回声をかけていただいて、本当にありがたいと思っています。

—高校教員を辞され、大宮アルディージャユース(現、大宮アルディージャU18)の監督に就任されたのは驚きでもありました。それから拓殖大でも指導され、JFAのナショナルトレセンコーチ、さらには東ティモールのU19/21代表監督などを歴任され、直近は松本山雅FCのユースダイレクターとしてご活躍されていたとのこと。そのお話は、のちほどさせてください。

最初は柏委員長に、というか、昨年の就任時にお話を聞いていませんでしたので、この数年行ってこられた活動を振り返ってもらいましょう。

柏 よろしくお願ひします。2019年4月、教員を退職したと同時にユースダイレクターとなり、本当に久しぶりに技術委員会のメンバーに加わりました。20年ぶりくらいだったと思います。

与野西中時代、3種の技術委員長になりましたが、その後は県中体連の委員長、さらには全国の委員長と大会運営をメインに仕事をしていました。自チームもありましたので3種のトレセンは見ていましたが、2種や4種まではほぼ見ることはありませんでしたね。

それがユースダイレクターになって、県内各地に足を運ぶようになりました。ただ、ユースダイレクターという立場が浸透しておらず、なかなか難しいこともありました。それでも4種の方々とは元委員長の秋山さん(和雄氏)が与野つながりで顔見知りでしたし、高体連とは教員チーム(埼玉教員サッカークラブ)で一緒だったメンバーも多く、また進路でお世話になった先生方も多かったので、様々な会合や総会に出席させていただき、顔を広めてきました。

その中で一番驚いたのは、それも衝撃だったのは、4種の少女、3種の女子のレベルの高さでした。いいなと思う選手が何人かではなく、たくさんいるんです。レッズレディースのアカデミーの選手たちのレベルの高さは知っていましたが、驚きました。

選手たちは力を持っています。先日全国で優勝したレジスタFCのスタッフから「県のベスト8は全国のベスト8と変わらない」という話を聞きました。チームとして県全体のレベルは高いと思います。

3種・4種・女子トレセン・GKトレセンも活発に活動されていますが、コロナ禍の影響で継続的なトレーニング、関東レベルのトレセンリーグ・国体など活動が制約を受け、他都県との違い、また埼玉県の現状が把握できていない感じがします。今後再開した時に、後れを取らないよう県内での活動も高い要求を求め、指導者も現状に満足せず対策を練る必要があるかと思っています。

FAコーチ採用に向けて

—だから、もっと伸ばしてほしいということですね。「力」というと、3種、2種についてはいかがですか。

柏 3種はLAVIDAが安定していますね。2種は昌平が、また女子はレッズレディースのジュニアユース、ユースがそれぞれ結果を出してくれていますので、どの種別も全体的には高いと思いますね。

ただ、課題としては、縦の交流が少ないということです。4種と3種、3種と2種、2種と1種、という形での指導者も含めた交流が少なく種別の中で終わってしまっています。これは解消したいものですね。

—なるほど。これらはユースダイレクターとしての視点だったと思います。2020年の途中からは技術委員長にも就任されました。

柏 ちょうどコロナの影響で、それぞれの大会・トレセンなどの活動をどうするかという検討が多かったです。技術委員長を引き受けましたが、それと同時に次の候補として田中さんを荻野清明氏(SFA技術委員/浦和東高教諭)と説得し続けました(笑)。その中でFAコーチを採用したいという田中さんの要望を受けて、一緒に山崎さんをお願いしようという話になっていきました。FAコーチの採用はJFAからの要望でもあり、埼玉の現状を考えてもここ数年、誰かに入ってもらうことは検討されてきました。というか、理事会などの会議で強く求めて、ようやく認めていただいたという状況ではありません。

—FAコーチの必要性はどのようにお考えでしたか。

柏 とにかく指導者にレベルアップしてもらわなければならないと考えました。それは大会を見ていても、トレセンを見ていてもです。

大会では、ベンチからは勝ちにこだわりすぎていると思える指示が飛んでいます。これを的確なアドバイスや、試合の流れを自チームに変えられるような声掛けになるといいと思っています。トレセンにおいては、集まってくれた選手たちをチームとはまた違った角度から見てアドバイスをしてほしいのです。素晴らしい素材である彼ら彼女たちが最終的にプロとなり、日本代表になってほしいわけですから、指導者にはその手助けをあげてほしいと考えています。

埼玉で育った選手たちがもっと多くプロに、代表になってくれるためには、指導者自身のレベルをもっと上げなくてはならないのではないのでしょうか。まだまだ自分自身の感覚での指導、これまでの経験則に基づいた指導をされている指導者が多いというのが課題です。これから4種ではベンチ入りするのにD級ライセンス以上の所有が義務化されるそうです。B級、C級、D級の各コース、リフレッシュ講習会も増やして指導者養成事業を拡大しなければなりません。それに伴い、スケジュールを含めた大会そのものの見直しも急務ですね。

—その上で、来年度は田中さんにバトンタッチされるわけですね。

柏 委員長は田中さんをお願いして、山崎さんがFAコーチ、そして私は引き続きユースダイレクターとして参画します。この三人が中心となって埼玉県技術委員会スタッフ、指導者、養成インストラクター、キッズスタッフ、各種別トレセンスタッフ、県内登録チームスタッフと共に、埼玉のサッカーをより発展させて行こうと思っています。2022年度はその初年度スタートということです。特に山崎さんからは、田中さんや私にはない観点から現状を分析して、我々も含めた県内の指導者の皆さんにアドバイスをしてもらえたらと思っています。今も一緒に回っていますが、話を聞いていても勉強になるんですよ。

「思いが原動力になる」(山崎)

—そういう期待を受けて、山崎さん、改めていかがでしょうか。

山崎 FAコーチに就任してから、各所に伺ったり、また担当者の方々とお会いしているところです。それも柏さんにすべてお膳立てしていただきました。フットワークが軽くて、すごいなと。一緒に動いていますが、「埼玉をよくしよう」という思いは強く、その思いこそが大事だと思っています。まだ少しずつですが県内を歩き始めて、柏さんのおかげでスムーズに皆さんの中へ入ることができています。

—「埼玉をよくしよう」という言葉、どのように理解されていますか。

山崎 子供のことを大事にすることはもちろんですが、我々大人が「誠実」であることも大事だと思っています。そう、嘘をつかない、子どもたちのお手本になる……誰のためにサッカーをするのか? その理念という価値観が共有できてこそ「埼玉をよくしよう」という意識につながると思っています。この年齢でしばらく離れていた埼玉に



柏悦郎委員長



山崎茂雄 FAコーチ

戻り、蓄積した力を生かすことができれば幸いです。それもこれも「思い」があったこと。「思い」が原動力になりますね。

—具体的に、すでに感じていること、よりよくしていきたいことは伝えてきたでしょうか。

山崎 やはり指導者ですね。まだ一ヵ月程度ですが、見ている範囲では指導そのものが予定調和の感じがするんですね。もう一度そこを整理してほしいと思っています。というか、前進してもらえようサポートしたいですね。原点に立ち返る、可視化する、理念を共有する……大事なことです。

—選手たち、子どもたちに対してはいかがでしょうか。

山崎 インテンシティの高さの上に、技術と知恵を身につけてほしいと願っています。サッカーでいえば、アタックだけではなく守備もということになります。そうそう、JHoC（Jリーグヘッドオブコーチング養成コースの略）でこんな言葉を学びました。

「GoodはGreatの最大の敵だ」

埼玉の子どもたちを見ていると、各種別のトップチーム以外にも可能性を持っている選手はいます。

また、アンディ・ロクスブルク（AFCテクニカルダイレクター、元UEFAテクニカルダイレクター／スコットランド）は、育成に関してこんな言葉を残しています。

「指導者は、選手の未来に触れている」

4種くらいだとまだまだ振幅は大きいのですが、大人のコーチに向かってくいついていく子どもたちを見ると「埼玉に帰ってきたな」と感慨深いですね。

選手たちはナショナルトレセンなど様々な形で選ばれるのですが、やはり各チームでベースを共有していきたいのです。もっと選手は伸びるはず。そのために、特に指導者養成の現場では、そのベクトルを合わせていきたいと思うのです。

—なるほど、選手たちの力を伸ばすためにも、もっと指導者の意識、ベクトルを合わせる必要があるということですね。

山崎 でも、声をかけていただいたときには驚きました。現状の課題を示されて、埼玉も過渡期なんだと。ただ、県内出身のプロ選手も多いですし、指導者を見てもいろいろな経歴をお持ちの方が多いのが埼玉です。皆さんに認めていただけるよう、がんばっていききたいと思っています。

「龍太郎とならやってもいい、と」（田中）

—ありがとうございます。謙虚に意気込みを語っていただきましたが、次期委員長で、今回山崎さんとの契約を成就させた田中さんはいかがでしょう。

田中 まず、委員長就任についてですが、柏さんと清明さん（荻野氏）がお二人で学校にいらっやっして「国体の監督をやるか、技術委員長をやるか、どちらかを選んでほしい」と言われたんです。

こちらとしては、県高体連の委員長も終わり、自分のチームに専念しているところでした。あと県のフェアプレー・規律委員長にもなったばかりでもあったので、「それはちょっと」と答えたのですが、「埼玉に恩返しを」と言われ……いや、十分に恩返しはしたつもりでしたが、結局は「私でよければ」と技術委員長ということになりました。

ただ、まだ自分のチームを持っていますから、全体的な掌握については正直難しいと。そんな中で、他の47FAでは技術専任者、いわゆるFAコーチと契約して体制づくりをしていることを聞きました。それならば、だったんです。要は、FAコーチを置くというのが、私が技術委員長に就任するにあたって、柏さんと清明さんをお願いしたこと。そこから人選が始まり、山崎さんをお願いできないかと思ったんです。

—そこで敢えてお聞きしますが、なぜ山崎さんだったのでしょうか。

田中 高校のときから山崎さんのプレーを見ていますが、大学では一緒でした（順天堂大学）。初任校は私が越生で、山崎さんが狭山工業で、試合中一緒に並んで「あのプレーは」とか言いながら見ていた

のはいい思い出です。その後、川越南と川口北でも交流していました。ただ、アルディージャ入りにはびっくりしましたね。「ついにサッカーで飯を食うんだ」と。その後JFA、東ティモールと、移られた先々から写真を送ってもらい、松本山雅時代は大宮南とも練習試合をしてもらいました。

いろいろなことを経験されて、指導者として数段違う人になっているのを感じました。今、埼玉をもっとよくしたいと思い、そのためには山崎さんの力をお借りしたいと考えたのです。

他のJクラブからのオファーもあったと思います。SFAに入ること、また人生を変えてしまうことになりすし。ただ「龍太郎とならやってもいい」とおっしゃっていただいて、ありがたかったです。

埼玉のサッカーに関わっている指導者の皆さんは、誰もがみんな「埼玉のために」と思って指導されています。ここからもっとよくするには、ハードルは高いと思いますが、少しずつ取り組んでいきたいと思っています。

—そこで山崎さんに依頼したい最重要課題を挙げるとしたらなんですか。

田中 たくさんあって、一つじゃないですね。指導者養成、普及、トレセン、女子……いろいろなことをいい方向に持って行ってほしいと思っています。

正直、教員時代はざっくりとした語り口でしたが、Jクラブも経験されたことで見方とか考え方が細かいんですね。話を聞いて、私も勉強になります。そう、私でも勉強になると思うのですから、若い指導者の皆さんはもっと学べると思うんですね。少し話をするだけでも違うと思います。要は、私はすでに得をしているのですが（笑）。これからは山崎さんからお聞きしたことを広めていきたいと考えています。

それにJリーグが考える「育成」を学ぶ機会は、浦和レッズと大宮アルディージャのスタッフ以外にはありません。これから山崎さんが行くところ、どこに行っても誰にでもそういう話をしてくれるはず。これは、すべてのカテゴリーの指導者にとっては大きなチャンスではないでしょうか。

「体系的にどう育てていくのか」（山崎）

山崎 松本山雅でテクニカルダイレクターを三年間経験したこと、JHoCで学んで私自身にとって新たな視点を持たせてくれました。これまでは「スキルをどう伸ばすか」を意識していましたが、今はプラス「体系的にどう育てていくのか」に変わりました。正直、選手自身や指導者の個性を潰さないために仕掛けること、我慢することが、待つことが多かったと思います。その成果として松本山雅では、ほぼゼロベースのところから始めて、昨年（2021）は、ナショナルトレセンをはじめ、エリートプログラムに二人、U-16日本代表に一人、送ることができたのはよかったですね。それこそスクールからU-18まですべてを見ていましたから。

—この山崎さんの「熱」をどう感じてもらえるでしょうか。

山崎 定期的に4地区を回りたいですね。

田中 そう、「熱」が違うんですよ。だから話をしないと損をすると思うんです。「何か一つヒントをもらおう」でいいんです。聞けば、必ずワンランク上の指導ができるようになると思います。

山崎さんからは「あのプレーはダメだ」とかの言葉を聞くことはありません。どのチームのサッカーを認めた上で「ここをもっとよくすれば」と建設的な意見ばかりです。そういうサッカーの見方は、私なんかからはかけ離れていますね。

山崎 いや、そう意識しているわけではないんですけどね。

柏 現状の中でアドバイスをもらって、指導者も選手も成長してくれればいいんです。どこのチームも同じサッカーではなくて、個性を認めた上でちょっとしたアドバイスをもらえるといいですね。

田中 そこは指導者としての対応力が問われますね。トレセンリーグなどを見てもらって、どこをどう修正すればいいのかアドバイスをもらいたいですね。私が行っても「がんばれ」くらいですから（笑）。柏さんの言う通り、選手だけでなく指導スタッフも成長してくれればと願っています。

4月にはJFAから新たな「Japan's way」が出されることになっています。それも受けながら、埼玉としても「Saitama's way」を掲げたいものです。



田中龍太郎 新委員長

県大学連盟所属チームの躍進に期待 ～東京国際大学、城西大学W昇格を祝う～

東京国際大学と城西大学がやってくれました。同時に昇格を果たしてくれました。ということで今回は、両チームをご紹介しますと思います。この1年を振り返りながら、大学サッカーの現状、これからも伺ってきました。(聞き手/広報委員 荒川裕治)

東京国際大学、4年ぶりに関東1部復帰～前田秀樹監督に聞く

守備の徹底からの劇的な変化

—関東1部への復帰、おめでとうございます。2試合を残しての優勝決定と素晴らしい結果でした。

前田 2年前には都県リーグへの降格争いをしていたのが、昨年は断トツの1位で1部に昇格することができました。メンバーは大きく変わっていないのですが(笑)。

—その中でも違いはあったと思います。

前田 この2年で思ったことは、Jリーグのアカデミー出身選手は「Jクラブで教わった」ということがプライドになっているということ。なかなか変わりませんね。逆に高体連出身の選手は、素直です。

例えば、J1リーグチームへの加入が決まった学生(2023年に加入が内定)は、本当にプライドが高い選手でした。また、サッカーそのものはわかっていませんでした。入って1、2年はこちらの話に聞く耳を持っていませんでしたからね。ですから、プロになることも無理だと思っていました。

そこでどうしたかということ、守備を教えたんです。それを徹底させました。彼の守備からボールを奪って、彼がゴールを決めた試合がありました。試合でそんな成功体験もできたのですから、そこからの浸透は早かったですね。ですから各クラブのスカウトの皆さんからは「全然変わりましたね」と声をかけてもらえるようになりました。実際、そのチームに練習参加させてもらったときに、チームの監督から「こいつが一番いい」と声をかけてもらったそうです。

—変化というよりも、成長ということでしょか。

前田 攻撃のセンスはないんです。ただ、よく動かし、フィジカルも強い。あと守備力もあるということでボールを奪ったらゴールまでいけるんです。聞くと、ユース時代は、ゲームを作るだけでよかったんですね。あまり動く必要がなかったようなんです。ですから「守備をしないなら、試合に出さないよ」と言ったら取り組んでくれて、彼が守備をするようになってチームが勝っていくようになったんです。

大学までくと、今持っているポテンシャルを発揮させられるかどうかです。もう大学では成長させる時間がありません。

—チームとしての変化はいかがだったでしょうか。

前田 一昨年は負けるとチームが分裂していくような感じでした。4年生たちが「自分のサッカーが正解」と思っていて、まとめるのが大変で、改めてチームを一つの方向に持っていくことは大変だと実感した年でした。

先ほどのJクラブと高体連ではそれぞれ考えが違いますから、各自が主張しだすとまとめるのは難しい。あるポジションでボールを持った、奪ったという場面でJクラブ出身は「下げる」。でも高体連出身だと「蹴れ」。これの一つにすることは難しい(笑)。例えば、とある高校は、チームとしてパスをつなごうとするけれど、これも一人だけじゃなく、周りが連動しないと難しいじゃないですか。

さらに言えば、関東大学1部のチームならば、ほとんどつなぐサッカーをできているんです。それがウチのようなタレント性のない選手たちを育てながら勝つのは難しい。高校・大学と一貫性をもって育成に入っていけると楽ですよ。

フォアチェックに変えた

—印象に残っている試合がありましたら振り返っていただけますか。

前田 開幕戦の相手は日大でした。ケガでセンターバックが不在という中、登録ミスがありました。先制されて、なんとか同点にしたんだけど、結局は逆転負けをしてしまいました。その時のセンターバックはMFの選手を使っただけです。

次の試合で高校選抜にも入った一年生の選手を起用したら、これで守備が安定したんです。改めて選手層を厚くしないとダメだなと思いました。

そうそう、去年はリトリートしてカウンター攻撃というパターンも試してみました。でも、ウチのレベルだと相手のボールホルダーに対して、誰が行くのか?という時点でボケてしまうんですね。要は「人はいるけど」、シュートを打たれてしまうというパターンになったんです。リトリートは選手たちを消極的にしてしまいますね。だから「これはダメだ」と思った時点からフォアチェックに変えました。FWには運動量を多く求めることになりましたが、クーパー走で3600mはいける選手が何人かいますのでそれが可能でした。

やはり前からの守備ですね。そこからいい攻撃につながります。積極的にボールに向かっていかなければ、何も起こりません。ということは、修正もできないのです。しっかりボールに行つてこそ、その判断が成功なのか失敗なのかわかりません。もちろん最初からうまくいくことはありませんけど。

でも思うのは、失敗を恐れる選手が増えているような気がします。失敗するとコーチに怒られるからと思えば思うほど、主張しなくなり。ただ黙々とプレーするだけ。しかし選手というのは、要求しないと成長しないのです。「やらされている」だけ、サッカーを楽しんでいるとはいえません。

選手たちはよく「プロになりたい」と口にします。でも、なれる力があればここには来ないでしょう。でも、ここに来ればJクラブと練習試合ができたり、天皇杯ではJクラブを相手に勝ちに行くのですから。それが勉強になりますし、財産になります。実際、何がどう通用するかわからないのですから。

チャレンジすると伸びるんです。伸びると「やってみよう」と素直に聞き入れてもらえるものです。

「恐れるな」「勝負しろ」

—指導論につながりますね。また選手が受け身になってしまっている傾向にあるのは残念です。

前田 話を戻しましょう。去年優勝できたのは、面白い選手がいて、そこに守備のやり方を徹底させたからです。守備に関しては、とにかく「恐れるな」と。どうしても前に前に行くくと後ろが薄くなり、マンツーマンになってしまいます。そのためには最終ラインの選手たちには1対1の強さを要求しました。でも、それってサッカーの原点じゃないですか。1対1。それは攻撃でも守備でも同じで、1対1で勝つことが重要なのです。

「1枚余らせないと」という声もありましたが、それでは迫力もスピードも出ません。だから「蹴られたら、ラインを上げろ」「前が行くなら、後ろも上げろ」と。どこかでリスクを冒してでもプレーしないといいサッカーはできないものだから。だからサイドバックには「高いポジションでパスを受けたら、そこから勝負しろ」と言い続けました。そこで逃げたら意味がありませんし、得点につながりません。

そこで思うんですよ「子どもの頃からゴールに向かいなさい」って。—何が目的なのか、ですね。

前田 いい外国人選手は守備もしますし、突破もします。Jリーグを見ているとパスしか考えていないようなプレーが多いですね。それでは怖さもなければ、運動量もありません。やはりボールを奪う



前田 秀樹 監督

か失うかという攻防の激しさが必要ですし、その激しさが運動量につながります。また激しくいかないとFWが成長しないんですね。
—ということで、そういう激しいサッカーを関東1部でぜひ見せてください。さらに優勝も期待しています。

前田 選手たちには、いつも「優勝を狙う」と言っています。プレッシャーをかけるつもりはありませんが、プレッシャーはかかるものなのです。そのプレッシャーをエネルギーにしていかなければ勝てま

せん。また、プレッシャーがかかる中でサッカーができることは幸せなことじゃないですか。

天皇杯に出場が決まると理事長から「埼玉県の代表なんだから」と声をかけていただきます。そういう使命感を持って臨みたいですね。まずは2部でやってきたことがどれだけ1部で通用するかです。今年もよろしく願いいたします。

城西大学、11年振りに関東2部へ昇格～東海林 毅監督に聞く

しっかりとクラブを整えることが第一

—関東2部への復帰、おめでとうございます。また、東海林監督としても就任2年目で結果を出せたことは大きな喜びだったと思います。

東海林 ありがとうございます。前職の立正大学でも東京都リーグから関東2部に昇格したこともあり、感覚としては近いものがあったと思います。また、立正大学は熊谷で、城西大学は坂戸ですので、チームとしてはある程度は知っていました。

今回、教員として講義を持たせていただきました。スポーツ指導論、体育実技、アスリート論、あとはC級コーチのライセンスが取得できる授業など。もちろんゼミもあります。魅力だったのは、指導現場だけでなく、アカデミックなところもつながら学生として選手を強化していきたいという話をいただいたからです。最近の大学の監督さんで、教員も兼ねている方は少なくなりました。

確かに時間的には大変です。しかし、大学でしかできないこともあります。例えば、学生にGPS（グローバル・ポジショニング・システム）を装着してサッカーをさせることやドローンでの撮影、栄養とパフォーマンスの関係などの研究としての視点です。サッカー現場と研究・教育が融合できれば、強化につながるのではないのでしょうか。
—となると、チーム作りからの着手だったのでしょうか。

東海林 指導現場ありきですね。しっかり「クラブ」を組織として整えることが第一です。そして人が、選手が整っていないければ、クラブとして継続的な力は発揮できないと考えています。では何ができるかということ、理念を構築し組織を整備する、部局などを作り学生にそれぞれ役割を与えていくことです。当然、選手の中で温度差は出てきますが、予想以上に前向きに取り組んでくれる選手が多かったのは印象的でした。

—選手たちの反応はどのようにして感じられましたか。

東海林 選手たちの意見を聞いたんですよ。「これやる？」とか、「どうこれ？」とか。週に1回、2週に1回のときもありましたが、私と対等に話をできるミーティングを行うようにしました。幹部として動いている選手を何人かピックアップしてではありませんが、そこで取り組みへのコンセンサスを得るようにしました。

土台作りが始めて、そこからいかに質を高めるか。立正大学でもここには時間をかけました。理想としては、このクラブにしていると人が育つという環境です。

「なぜ勝てたか？ みんなが部局でがんばってくれたから」

—ということは、この昇格というのは大きな成果だったのではないですか。

東海林 まだまだこれからですが、一つ手ごたえを感じる事ができたという思いです。これで選手たちは、やっていることを前向きに捉えてくれるようになったと思います。ただ、やはりもうワンステップできるだろうと要求しているところですね。

実際「なぜ勝てたか？」という話の中で強調していたのは「プレーではなく、みんなが部局でがんばってくれたから」でした。

—まさにチーム一丸となって、昇格を果たされたということでしょう。

東海林 誰もが限られている時間の中でよくやってくれた結果です。スタッフも有能で、こちらの思いを先回りして「これでいいですか？」と聞いてくれます。選手たちを見ても、だれか一人ではなく、毎試合誰かが活躍してくれて、全員がコンスタントにプレーしてくれました。ですから、県のリーグ戦でも取りこぼしをすることなく終わることが

できました。

選手たちには、ピッチ上だけでなく地道にこういうことをしていくと上手くなる、ということを実感してもらえたと思います。正直、4年くらい、それこそ選手が一巡するまでかかるかなと思いましたが、想定していたより早かったですね。
—何か手ごたえを感じてくれた、そこからは早いのではないのでしょうか。逆にそれまでが時間がかかるというか、待つ時間が必要だということなのですね。

さて「関東大学サッカー大会」の話を伺いたいのですが、形式が変わったんですね。

東海林 今までは4チームずつ2つに分かれて、それぞれのグループ1位対2位が決定戦を行い、勝った方が昇格というレギュレーションでしたが、今回から6チームでリーグ戦となり、1位と2位が昇格、3位がプレーオフに挑むことになりました。3位でもまだチャンスがあるというのは、大きかったですね。また、厳しい戦いがあればあるほどいい経験として蓄積されます。この5試合というのは、選手たちにとって有益になるだろうと前向きにとらえました。その中で、最終戦で負けてしまったことがターニングポイントになったのではないのでしょうか。

—では大会を振り返っていただけますか。

東海林 初戦は作新学院大学でした。試合をしたことがなかったのですが、戦ってみると個々のレベルは高かったですね。そういうことを測りかねているところでしたが粘り強く勝つことができました。個人的に1対0が好きなんです。選手が一番成長する試合展開だと思うんです。こちらは胃が痛くなりますけどね（笑）。

県リーグでは僅差の試合があまりなかったのですが、それでも最終節の共栄大戦では0対2から追いついた試合などがあり、そういった経験が生きたと思います。そのあと青山学院大学とは引き分けましたが、4試合終わったところで3勝1分で2位。しかし、明治学院大学との最終節は引き分けでも2位だったのですが、負けてしまいました（0対1）。これで3位。

大会前、冗談で「入替戦もあるかもしれないな」なんて言っていたら、本当に戦うことになってしまいました。更なる経験の蓄積になると。立教大学（関東2部10位）との試合はさすがに胃が痛くなりましたが、最後は見事な粘り勝ちでした。

—85分に均衡を破ったものの、90+2分に同点とされました。しかし、90+5分に決勝点でしたね。

東海林 勝負は時の運と言いますが、あの試合はこちらにあったのでしょうか。もう学生たちは、「次は関東1部昇格」と意気込んでいます（笑）。

フィジカルと人間性を見る

—頼もしいですね。さて、11年振りの関東2部への復帰となりますが、一つお聞かせください。先ほど、「質を上げる」という話が出ました。具体的な話をお聞かせいただけますか。

東海林 考えさせることが大事だと思っています。一人だけではなく、チームとして考える。「これは本当に正しいのか？」と。

どうしてもサッカーは個にフォーカスされてしまいますが、大事なのは11人という組織であり、チームワークです。このチームワークこそが、チームそのものが強くなる鍵だと考えています。



東海林 毅 監督

問題は、チームワークの重要性をどの年代から伝えればいいのか。個人的には高校年代から強調してもいいと思っています。それも個を埋没させるのではなく、チームとして個をどう活かすかということです。そういう意識を持つことが大事ですね。

—この大学という年代で、身につけさせるにしても、やはりベースはあってほしいものですね。でなければ、理解できないこともあるかもしれません。そういう面でスカウティングはどうされているのでしょうか。

東海林 志望してくれる選手たちには直接会い話しますが、誰も技術はある程度持っています。見るのはフィジカルと人間性ですね。あとは、自然とついてくるものです。

見ていて思うのは、Jクラブの選手たちは上手いです。スタート時点では高体連の選手たちよりも上手い選手が多いです。でも、大学に入ったら技量的に並んでくる。そして、伸び悩むことが多いです。もう少し言えば、その技術は教えられたものなのか、自発的に身に付けたものかで違います。中には、なぜ上手くなったかわからない選手もいますね。

そういうこともある中、志望する選手とは練習の後で面接をしています。大学サッカーに対して、真面目に愚直にできるかどうか。ま

た(サッカー以外に)どんなことに興味があるのかなど。無名な選手でもここで可能性を感じられることがあります。そういう選手を求めています。

—そういう可能性のある選手たちが、認められてほしいものです。

東海林 具体的に言うと、選手として認められるということは、プロということなのでしょうが、プロになるというのは運も必要で、タイミングもあります。また、いろいろなスカウトの人に見てもら必要があります。見てもらうことで成長にもつながるでしょう。そのためにも関東リーグ2部での活躍、さらに1部への昇格が目標となります。見てくれる人の数が違いますからね。そのためにも、クラブ(組織)、チームをよくしていくことが大切だと思っています。

仮にプロになった場合、どうやって認めてもらうのか、また長くプレーをしていくのか。また辞めた後をどうするのか、または、プロ選手とか関係なく、いち人間として社会にどう貢献し、自分の価値を高めていくのか……そういうことを考えられる人材を輩出していきたいですね。

—今後楽しみにしています。ぜひ次は1部へ。ありがとうございました。

「関東大学リーグ Norte (ノルテ)」設立～県大学リーグが次のステップへ

1種委員長 植松孝博 (県大学連盟事務局長)

2022年度から従来の「埼玉県大学サッカーリーグ」と「北関東大学サッカーリーグ」(群馬、栃木、茨城)が合併して「関東大学リーグ Norte」という名称になりました。

関東大学リーグが1部・2部で展開していますが、2023年度より3部リーグが新設されることを受けてのことです。「関東大学リーグ Norte」も1部・2部でスタートし、開幕は4月第1週を予定しています。より質の高いリーグ戦を行うことにより、来る「関東3部」につなげていこうと考えています。

「関東大学リーグ Norte」の1部には、昨年度の「埼玉県大学サッカーリーグ」1部の上位5チーム(共栄、尚美学園、平成国際、埼玉工業、獨協)が加わり、下位チームは2部に回ります。1部、2部とも各10チームでのリーグ戦を基本的には各大学のグラウンドで行い、ホーム&アウェイの18試合を予定しています。

昨今、大学の都内回帰が進んでいます。県内にキャンパスを持つ大学でも、芝浦工業大学が東京都リーグに移ることとなり、鳩山町にある東京電機大学は理工リーグへ移ることが決まるなど、県大学リ

ーグに所属していたチームが減少傾向にあります。今後、少子化を受けてさらに減少する可能性がある中、選手レベルもそうですが、試合運営、審判も含めたリーグそのものの質の向上は喫緊の課題ということもあり、決断しました。

特に近年は、関東2部と都県リーグの上位チームを比較しても力関係は僅差と言ってもいいでしょう。また、県大学リーグ所属ながらJクラブとプロ契約をする選手も出てきました。県内外から集まってくる選手のレベルは高くなっていることは間違いなく、可能性のある選手たちが埼玉からプロの世界に羽ばたいてくれることは嬉しい限りです。

今年から東京国際大学が関東1部、城西大学が関東2部へとそれぞれ復帰しました。一つでも多くのチームがこの2チームに続き、埼玉の大学サッカーのレベルを上げてほしいと願っています。



植松 孝博 委員長

第76回国民体育大会「三重とこわか国体」関東ブロック大会を振り返る～

成年男子・吉田 弘監督 (尚美学園大学男子サッカー一部総監督)

「国体はアピールする場だ」

私が高校三年のときが三重国体で、私が決勝点を決めて優勝しました(静岡県選抜)。今回はあれからひと回りしたところだったんですね。

まず、今回の成年男子の選抜チームに呼んだ選手たちには、こう伝えました。

「勝とうが負けようが関係ない。ここは自分をアピールする場だ。自分を見せる場だ。いい選手がどうかを判断するのはスカウトなのだから。その代わりに、チームにとってプラスになるプレーをしてほしい。あと例えば、ワンタッチではなく自分で仕掛けていいのかどうかという判断のよし悪しは伝えるから」と。

彼らが持っているモチベーションを前向きにさせることが仕事でした。選手たちにとって自分のチームでのプレー、練習が最優先ですから、国体だからと言って何度も集めることはできません。

そこで考えたのですが、選手って「人のために」というのが得意じゃないんです。なんというか、自分のために得ることには反応するんです。それが今の学生ですね。あと、選手自身が本気にならないと伝わりません。「上手になりたい」「プロになりたい」と誰もが口にします。こちらとしては普段の生活を見ているから「今のままで大丈夫か?」と言いたくなることもあります。他人が見ている、見ていない関係な

く夢に向かって努力しているのかどうか。本気の選手たちは、それぞれ24時間常に考えて生活していますからね。夢を持つことはいいことです。その思いを膨らませてあげるのが指導者なんです。

サッカー以外のことをしてもいいんです。ただ、サッカーを中心に自分を向上させ、行動できればいいのです。そこは積み重ねしかありません。不器用であっても、やらないと一流にならないのですから。

もちろん上を目指すモチベーションというのは、行動の中で少しずつも見えてくるものです。ただ、他人に言われてやっているようではよくありません。指導者は、そういうベースを作ってあげることが大事なのではないでしょうか。

しかし「夢を持つ」というのは、ちょっと固苦しいですね。というのは、選手によって違うんですよ。選手によって、伝える言葉は違いますし、スイッチが入るタイミングも違います。またスイッチに気付ける選手は意外と少ないものです。だから「どのくらいまっしぐらの?」という客観的な視点や問いかけも重要です。



吉田 弘 監督

「評価されない」と他人のせいになしたり、原因を他に探しているようではよくありません。ここ尚美学園大学に来て5年になりますが、それが少しずつ変わってきていますし、入ってくる選手たちを見ても意識も学力も高くなっていると思っています。ようやく、ある程度私の言葉に響いてくれる状況になってきたと思います。

選手たちに何か得になる指導を

さて、今回のピックアップに際して、シーズン中でもありますから「出たくない」というチームもありました。それでも「2~3人出してほしい」とお願いし、かつ「チームとは違った部分を身に付けて戻れるとしたら得策ではないでしょうか」と進言しました。選手たちが自チームに戻ったときに、何かを還元できるようにしたいと考えていたからです。

これまで、U-17、U-20日本女子代表やナショナルトレセンなど将来ある選手たちを指導してきました。その際、いつも思っていたことは「彼ら、彼女たちに得になるように」ということでした。試合で勝とうが負けようが、選手たちの将来につながるようにと願っていました。振り返れば2010年、U-17女子ワールドカップの決勝で韓国にPK負けしましたが、あの悔しい思いが次の「なでしこジャパン」につながったと思うのです。負けもまた財産なのです。

選手たちがわかってくれたかどうかですか。いや、わかってもらおうと思っちゃダメなんです(笑)。くすぐただけです。やるのは選手本人たちですから。それに普通に能力はあるんです。

では、指導者として何をしたか。エッセンスとして選手起用と交代のタイミングでしょうか。試合は両方ともPK戦までもつれました。

決定戦の際「昨日と同じメンバーで行くぞ」と声をかけましたが、ただちょっとアドバイスをしました。少し相手 GK を疑心暗鬼にさせたただけでしたが、勝つことができました。

要はサッカーだけではない

よく言うのですが、「いい選手」は周りを使えると。相手の特徴をつかんで、パスの出し方を変えたり、相手の弱いところを突くのが上手いものです。「いい選手」は何が優れているのか？ 見る早さ、切り替えの早さ、見て見ぬふりをしたの駆け引き……自分の都合ではなく相手選手、相手チームをわかりながらゴールに向かうわけです。いろんなことを感じて、いろんなことを見て判断していかなければなりません。でも、正しい答えはないのです。

さらに、どうしたら「いい選手」になれるか。サッカーでも努力し、プラス人間的にも成長してくればいいのです。要はサッカーだけではないのです。

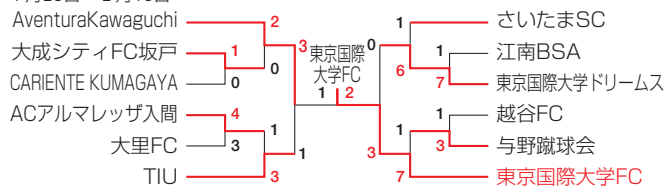
今、尚美学園大学サッカー部は200人。ここで学びたい選手が来てくれればいいですし、理想としては自然に集まれるようなチームになりたいと思っています。我々としては高校までやってきたものに“上乘せ”をするだけです。サッカーでも、人間性でも。選手によって言葉を変えたり、タイミングを変えたりするんです。おせっかいかなと思うけれど、関わる大人、コーチたちみんなで育てていくっていうのかな。これが日本のいいところを残していく要素のような気がしています。だから最近、思ったんですよ。「おせっかい親父になろうかな」って(笑)。

大会記録 ● 県内大会

1種・社会人

令和4年度埼玉県社会人サッカー連盟会長杯 兼 埼玉県サッカー選手権大会予選

1月23日～2月13日

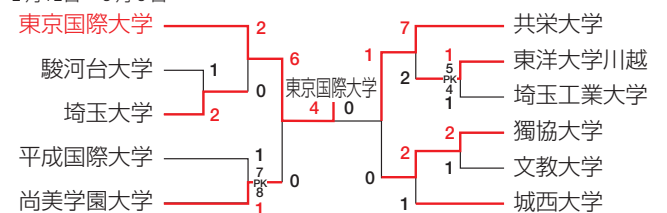


※優勝は東京国際大学FC。上位2チームが「彩の国カップ埼玉県サッカー選手権大会」に出場

大学

第3回埼玉県大学サッカー連盟杯 兼 埼玉県サッカー選手権大会予選

2月12日～3月5日



※優勝は東京国際大学。上位2チームが「彩の国カップ埼玉県サッカー選手権大会」に出場

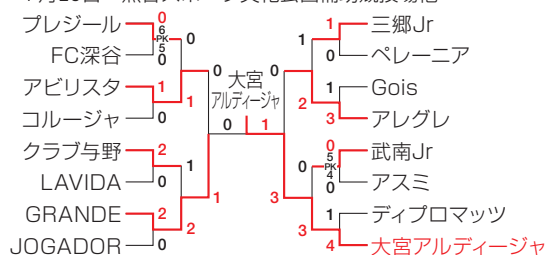


決勝 東京国際大学 vs 共栄大学

3種・クラブ

第31回埼玉県クラブユース(U-14)選手権大会

12月4日～1月29日 熊谷スポーツ文化公園補助競技場他

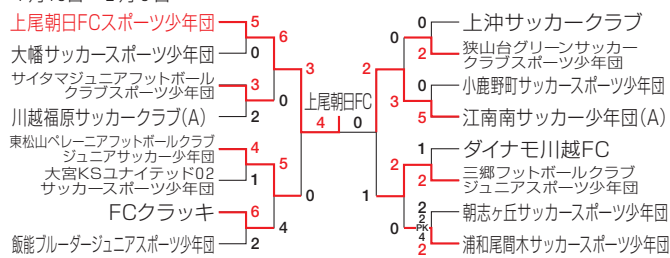


※優勝は大宮アルディージャU15

4種

第34回県民総合スポーツ大会 兼 第50回埼玉県サッカー少年団中央大会

1月16日～2月6日



※優勝は上尾朝日FCスポーツ少年団



優勝 上尾朝日 FC スポーツ少年団

第16回埼玉県第4種新人戦中央大会

1月30日、2月11日

浦和レッドダイヤモンズジュニア	4	1	FCチベッタ	2	0
上尾朝日フットボールクラブスポーツ少年団	0	0	はくつるフットボールクラブ	0	0
江南南サッカー少年団	4	0	FCアビリスタ	0	0
1FC/LIVENT	2	2	レジスタFC	2	1
1FC川越水上公園	0	0	KIDSPOWER.SC	2	2
DIPLOMATS Jr.入間FC	1	1	新座片山フットボールクラブ少年団	1	1
レジスタFC	4	10	さいたまシティーノースフットボールクラブ	0	0
ダイナモ川越東FC	1	1	レジスタFC八潮	0	0
			F.C.VELSA	3	3

※優勝したレジスタFCを含む上位2チームは、埼玉県代表として「JFA全農杯チビリンピック2022関東大会」に出場



優勝 レジスタFC



準優勝 新座片山フットボールクラブ少年団



決勝 レジスタFC vs 新座片山フットボールクラブ少年団

女子

2021年度第14回(公財)埼玉県サッカー協会会長杯 兼 第43回埼玉県女子サッカー選手権大会

12月19日 埼玉スタジアム第2グラウンド

大東文化大学 1-0 東京国際大学
(関東女子リーグ1部) (埼玉県女子サッカー大会優勝)

2021第9回埼玉県女子ユース(U-14)サッカー新人戦大会

12月11日～2月13日 熊谷スポーツ文化公園補助競技場他

●決勝トーナメント

1FC	3	0	白岡U14	1	0
越谷LF	3	0	アルディージャorange	0	0
白岡U14	1	2	GRAMADO	4	1
アルディージャorange	0	0	1FCセカンド	0	0
GRAMADO	4	1	アルディージャwhite	0	0
1FCセカンド	0	0	ちふれ	0	0
アルディージャwhite	0	0		1	0
ちふれ	1	0			

※優勝は白岡SCL U-14

フットサル

第18回埼玉県フットサルリーグ女子2021

●全日程終了

順位	チーム	勝点	勝	分	負	総得点	総失点	得失差
1	AOHレディース	15	5	0	1	96	9	87
1	ルルス女子	15	5	0	1	62	14	48
3	武南高校女子フットサル部A	6	2	0	4	16	47	-31
4	武南高校女子フットサル部B	0	0	0	6	2	106	-104

大会記録 ● 県外大会

4種

第28回関東広域少女選抜チームサッカー交流大会

1月8日、9日 吉見ふれあい運動広場

●決勝トーナメント

厚間レモンガールズ(神奈川県)	2	0	埼玉パロミーナ・イエロー	2	0
埼玉パロミーナ・レッド	2	2	埼玉パロミーナ・イエロー	2	9
埼玉パロミーナ・イエロー	2	2	千葉中央FC U12ガールズ	1	1

※優勝は埼玉パロミーナ・イエロー

チビリンピック2021 JA全農杯全国小学生選抜サッカー選手権決勝大会

1月22、23日 日産スタジアム

1回戦 レジスタFC 9-0 LIVE FC(北海道)

準々決勝 オオタFC 2-2 レジスタFC (3PK 2)

※優勝はオオタFC(岡山県)

女子

第5回関東女子U15リーグ参入戦・入替戦

1月8日～30日 駒沢第2球技場他

1回戦 白岡SCL 2-0 湘南ベルマーレU-15ガールズ

準決勝 CANA CRAVO FC 1-2 白岡SCL

●参入決定戦

小美玉フットボールアカデミー 0-1 白岡SCL

※白岡SCLは関東リーグへの参入が決定

フットサル

JFA第27回全日本フットサル選手権大会関東大会

1月15日、30日

1回戦 城西大学体育会サッカー部 1-2 ASVベスカドーラ町田アスピランチ

鳥天狗フットサルクラブ 5-5 バルドラール浦安セグンド (3PK 5)

※優勝はバルドラール浦安セグンド。上位3チームが本大会に出場

インフォメーション

■訃報～高橋 明元副会長がご逝去されました

去る2月18日、元SFA副会長及び事務局長、JFA理事も務められた高橋明氏のご逝去されました。享年74歳。戸田市役所サッカー部で活躍し、引退後は指導者としてだけでなく、2級審判を取得され、日本サッカーリーグも担当されました。役員活動としては、県自治体連盟から県社会人連盟委員長、さらに県審判委員、県広報委員長として種別を超えて多大な功績を残されました。またJFL、関東リーグのマッチコミッショナーも務めるなど県外での活動も多く、後進の育成にも取り組まれました。ここに埼玉サッカーへの長年のご尽力に感謝を申し上げ、謹んでお悔やみ申し上げます。

編集後記

すでにご存知の方もいらっしゃると思いますが、埼玉新聞に08年から毎週掲載していた「(公財)埼玉県サッカー協会だより」が昨年末に連載を終了し、本年より新コラム「明日(あす)へのグリーンカード～SFA広報委員会より」を月1回のペースで掲載することとしました。前コラムでは大会告知や試合結果が中心の内容でしたが、この新コラムではSFAが取り組んでいる事業について広く告知していきます。この「SFA NEWS」と連動する企画も進行中。ぜひ、お読みください。(藤田)